天皇の即位図

初公開！

特集展示

平成31年1月30日(水)――3月10日(日)

京都国立博物館 平成知新館（1F－4）

KYOTO NATIONAL MUSEUM

※会期中、展示替えを行います。前期：1月30日(水)―2月17日(日)　後期：2月19日(火)―3月10日(日)

寛文三年（一六六三）一月二十六日、後西天皇が譲位し、後水尾天皇の第十九皇子・識仁親王（さとひとしんのう）が受禅、三か月後の四月二十七日に霊元天皇として即位しました。識仁親王は、異母兄にあたる後光明天皇の養嗣子に入っていた儲君でしたが、天皇が二十二歳の若さで崩御した時にはまだ二歳であったため、親王が成長するまでの繋ぎとして即位した後西天皇が政務を執っていたのです。親王が寛文二年十二月に元服すると、翌年に後西天皇は譲位、十歳での新帝践祚となりました。

近年、この譲位と即位の儀式を描いた珍しい屏風絵が発見されました。その屏風は、狩野山楽を祖とする京狩野第三代の狩野永納（一六三一～九七）の筆になるもので、右隻に霊元天皇の即位式、左隻に後西天皇の譲位式の様子が描かれています。人物や建物には多くの貼札が付されており、儀式がどのように行われ、どのような人々が参列したのかを視覚的に知ることができる、高い資料的価値を有する作品です。本特集展示では、この注目すべき作品を初公開いたします。

実は、東京大学史料編纂所にはこの屏風を原本とする模本が所蔵されています。公家の正親町家伝来という点とともに注目されるのは、この模本に屏風と九条家との間に何らかの関わりがあったらしいことをうかがわせる記載がある点です。永納も含め、代々の京狩野画家は九条家と深い関係にあったことが知られており、屏風制作への九条家の関与も充分にあり得ることです。現時点では、九条家が本屏風の発注者であると断定することはできませんが、少なくとも、儀式の詳細を知る公家の情報提供があったことは確実で、どのような意図でこうした記録的な屏風が制作されたのかなど、今後この屏風の研究を進めていくうえで重要な情報であることは間違いありません。

折しも、平成三十一年四月三十日の今上天皇譲位、五月一日の皇太子即位を間近に控えた時期。江戸時代の同主題を描いたこの屏風を初公開するとともに、関連する資料をあわせ展示し、当時における天皇の譲位と即位に関わる儀式について考えます。

1 右隻

1　霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風
狩野永納筆

右隻には、寛文三年（一六六三）四月二十七日に行われた霊元天皇の即位式、左隻にはこれに先立つ一月二十六日に行われた後西天皇の譲位式の様子が描かれている。即位図では、紫宸殿のなかで冕冠を被り高御座に座す十歳の霊元天皇が見える。翳という道具によって隠されていた新帝の姿があらわになった、式のクライマックスである。一方、譲位図は剣璽渡御（三種の神器のうち剣と玉を先帝から新帝へ継承する儀式）を中心とする場面である。

京狩野第三代の狩野永納が本作を描くにあたり、儀式の詳細を知る公家等の関与があったことは間違いない。当時庶民にも公開されていた即位式の実態を知る視覚資料としても貴重である。

（福士雄也）

2　御即位図　東京大学史料編纂所蔵
3　御譲位図　東京大学史料編纂所蔵

「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」（作品番号1）の模本で、公家の正親町家に伝来した。細かな色注のほか屏風にある貼札も含め忠実に写されており、現状では判読困難な貼札の文字情報を提供してくれる。とりわけ注目されるのは「是狩野縫殿助永納於／九条家図之畢」との墨書で、原本である屏風の制作に九条家が何らかの形で関与していた可能性を考えさせる。

九条家は永納を含む代々の京狩野画家と深い関わりがあり、今後屏風の発注者や制作意図を解明していくうえで鍵となる重要な史料である。題字の筆跡から、正親町公明が収集したものと見られる。（福士雄也）

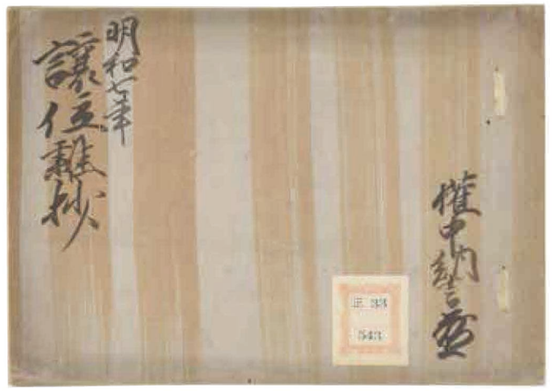
2

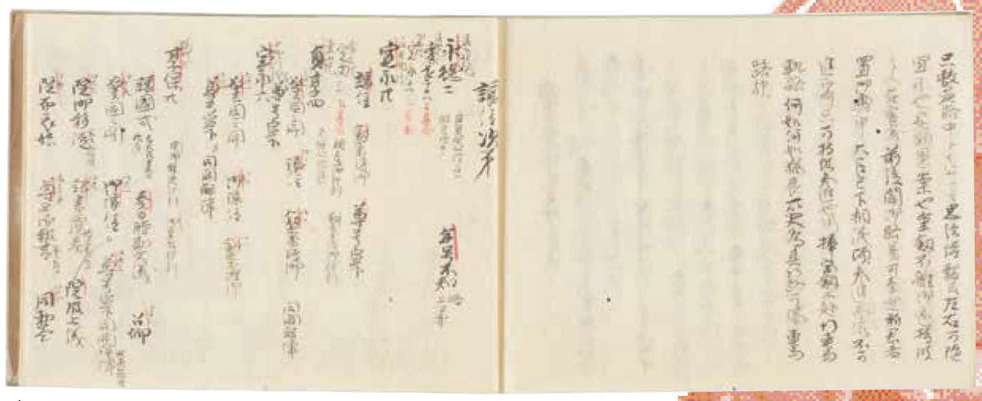
3

4　譲位雑抄　正親町公明筆
東京大学史料編纂所蔵

公家の正親町公明が、天皇の譲位式に関する記録を諸資料から抜粋集成したもの。藤原実資『小右記』、九条兼実『玉葉』、中山忠親『山槐記』、藤原定家『明月記』など貴族の日記を中心に、平安～江戸時代にいたる先例が列記される。「御即位図」「御譲位図」に記された題字は、公明自筆の本資料表紙題記と同一の筆跡を示していることから、これらの模本は公明により収集された可能性が高い。

公明は、明和七年の後桜町天皇譲位式および翌年の後桃園天皇即位式に関わっており、後者では宣命使（天皇の命令を読み上げる役目。但し平安中期以降実際には読まれなくなった）をつとめている。本資料編纂と模本収集の動機はこのあたりに求められよう。（福士雄也）



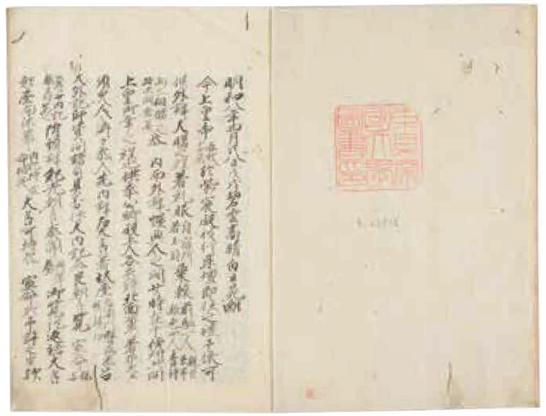


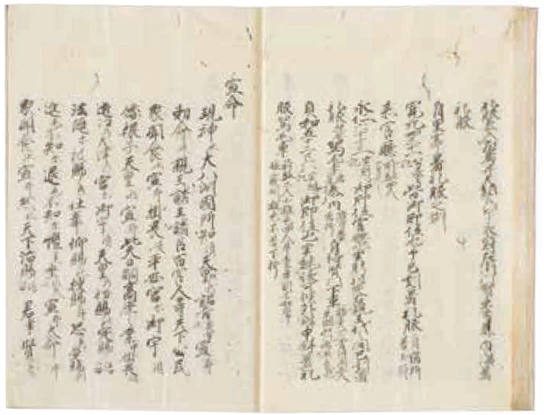
4

5　御即位記　正親町公明筆
東京大学史料編纂所蔵

明和八年（一七七一）四月二十八日に行われた、後桃園天皇の即位式に関する記録。筆者は、この即位式に宣命使として関わった公家の正親町公明である。儀式の次第に加え、内弁（即位式の責任者）以下主だった公卿の礼服やその着用順等についても詳述される。自らの宣命使としての作法は、鎌倉～南北朝時代の公卿である洞院公賢らの先例にならったという。

公明は前年に行われた後桜町天皇の譲位式にも携わっており、「御即位図」「御譲位図」（作品番号2、3）はそうした役目に備え収集されたものと見られる。（福士雄也）





5

6　寛文三年固関木契　郵政博物館蔵

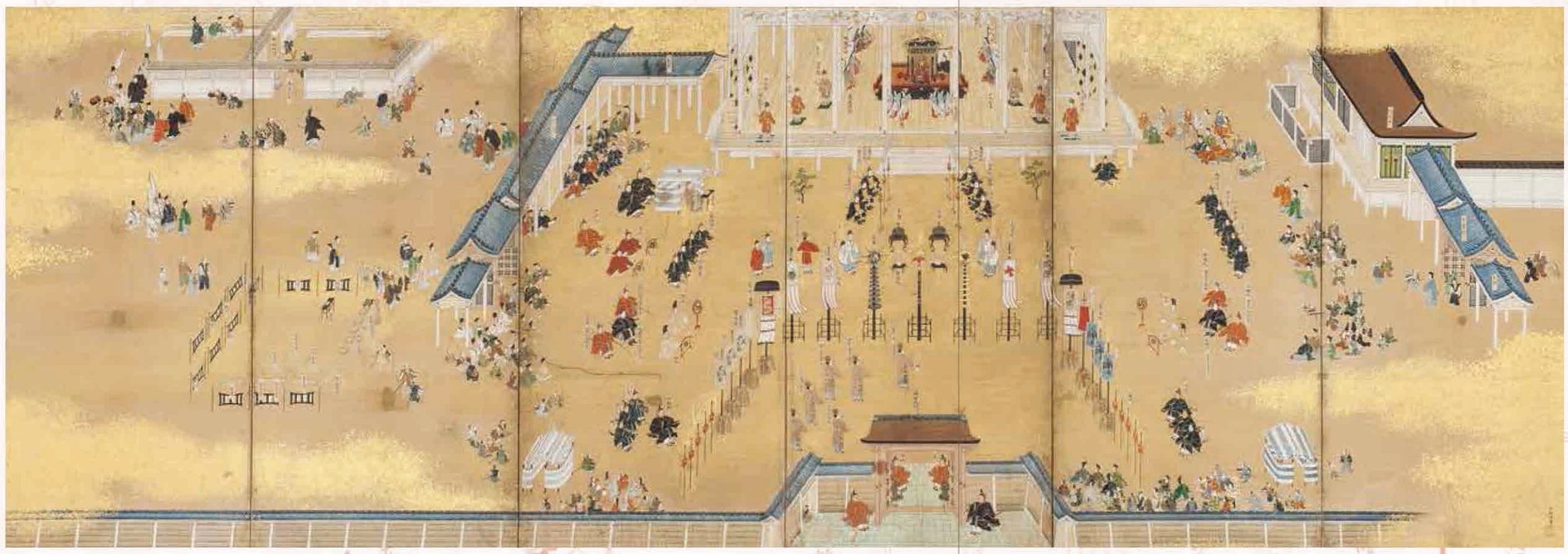
天皇の譲位に際して行われる諸儀式のうち、都での動乱阻止などを目的に鈴鹿・逢坂・不破の三関を閉鎖する措置を固関（こげん）という。固関にあたり、朝廷は固関使を派遣して各関を所管する国司に閉鎖を命じるが、その固関使の正当性を証明するのがこの木契である。木契は割符の一種で、二つに割った木片を朝廷側と国司側とで所持した。

「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」（作品番号1）左隻第二扇上部には、木契および関連文書の授受の様子が描かれている。本品は、まさにこの時作成された木契のうちの一つで、「賜美濃國」とあるので不破関宛のものとわかる。儀式の先例として保管されたと見られる貴重な遺品である。（福士雄也）

6

狩野永納筆「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」について

大阪芸術大学教授　五十嵐公一



1　霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風　狩野永納筆

右隻

屏風の概要

天皇の譲位と即位を主題とした紙本着色、六曲一双の三尺屏風である（作品番号1）。最近見つかった屏風であり、この特集展示が初公開となる。

屏風の右隻の右下、左隻の左下に「永納謹筆」の署名、「山静」（白文方印）がある。ここから描いたのは京狩野家三代当主の狩野永納だと分かる。二〇一三年、京都国立博物館で特別展覧会「狩野山楽・山雪」が開かれた。狩野永納は、その山楽の孫であり、山雪の長男である。

永納は日本最初の画家人物伝である『本朝画史』（元禄六年刊）を著したことで知られているが、多くの作品も描いている。それらの作品と比べると、この屏風には永納画の特徴が全面に現れていないことが分かる。それでも松や杉、人物といった部分には確かに永納画の特徴が出ている。この点から判断して、これを永納作と見ることに問題はない。

その永納の存命中に行われた天皇の即位は、寛永二十年（一六四三）の後光明天皇即位、承応三年（一六五五）の後西天皇即位、寛文三年（一六六三）の霊元天皇即位、貞享四年（一六八七）の東山天皇即位の四度である。従って、この屏風はこのうちのどれかに関わるものだと先ず考えることができる。

そこで、この推測のもと画面を見てゆくと、人名、職名、建物名、調度名などを墨書した貼札が複数あることに気付く。既に剥がれてしまったものも多いが、それら貼札に記される人名と職名に注目すると、寛文三年の公卿のそれに一致することが分かる。従って、右隻は寛文三年四月二十七日の霊元天皇の即位式、左隻はそれに先立つ同年正月二十六日の後西天皇の譲位を中心に描いたものということになる。この年、狩野永納は三十三歳である[1]。

1 以下、年齢は数え年とする。

霊元天皇即位、御所造営の経緯

寛文三年に後西天皇が譲位し、霊元天皇が即位した（系図参照）。この屏風はそれを主題としていることが分かったのだが、ここに描かれている具体的な内容を理解するためには後西天皇譲位と霊元天皇即位の経緯を理解しておく必要がある。そこで、この二十年程前から見てゆきたい。

寛永二十年（一六四三）十月、後水尾天皇の第四皇子が十一歳で即位した。これが後光明天皇である。しかし、後光明天皇は承応三年（一六五四）九月に二十二歳で崩御してしまう。後光明天皇には皇位を継がせる皇子がいなかったのだが、同年五月に生まれた異母弟の高貴宮に皇位を譲りたいと近臣に生前伝えていた。そこで、その遺志が尊重されるのだが、一歳では皇位を継げない。そのため同年十一月、同じく後光明天皇の異母弟であり、高貴宮よりは年長の良仁親王が皇位に就いた。これが後西天皇である。後西天皇は高貴宮が即位するまでの中継ぎという役割だった。そして寛文三年（一六六三）、十歳となった識仁親王（＝高貴宮）が即位した。これが霊元天皇である。

その霊元天皇の即位前、つまり後西天皇在位中に大事件が起きている。万治四年（一六六一）正月、関白二条光平の室の賀子内親王の邸から出火があった。この火が広がり禁裏御所をはじめとし、後水尾上皇の仙洞御所、明正上皇の新院御所、東福門院の女院御所などが焼失したのである。この御所焼失により後西天皇は白川の照高院に臨幸した。その後、同年二月に火災を免れた近衛基熙邸に内侍所仮殿が上棟。同月に後西天皇がこの近衛邸に移徙し、ここが仮内裏となった。この近衛邸は現在の京都御所の北方、今出川通に接する場所にあった。また、同月には新たな御所造営の準備も本格化し、四月には元号が寛文に改まった。

御所造営は進み、寛文二年（一六六二）五月に内裏の木作始、十一月には上棟式となった。そして寛文三年正月二十一日、識仁親王（＝高貴宮）が新内裏へ移徙した。識仁親王の即位が決まっていたため、後西天皇ではなく識仁親王が新内裏に移徙したのである。正月二十六日には後西天皇が仮内裏つまり近衛邸で譲位、識仁親王が新内裏で受禅して即位。そして、その約三カ月後の四月二十七日、新内裏で霊元天皇の即位式が行われた。以上のことを踏まえ、画面に何が描かれているのかを見てゆきたい。

右隻　霊元天皇の即位

右隻には寛文三年（一六六三）四月二十七日、霊元天皇の即位式の様子が描かれている。その前日、紫宸殿での即位式の準備が整えられた。そして迎えた二十七日、朝方に強い雨が降っていたが、それが辰刻（午前八時頃）に止み始める。巳刻（午前十時頃）には雨が止み、午刻（正午頃）からは晴れた。そんな記録が残っている。即位式は巳刻に始まり、未刻（午後二時頃）に無事終わった。即位式は少雨なら決行することになっていたが、雨の影響は受けなかったようだ。

この即位式を読み解く際、参考になるのは巻末に「右式房輔公作進也　寛文三年四月廿七日」とある九条家旧蔵「即位式　寛文三年　霊元天皇」である。これは儀式の進行責任者である内弁の鷹司房輔が即位式の翌日に記した一巻。これ↘

↘に『葉室頼業記』など当時の記録を参考にし、描かれていることを具体的に見てゆきたい。

画面の中心は第一扇から第四扇である。第二扇から第四扇の上方に描かれているのが紫宸殿である。その紫宸殿の下方に大きく描かれているのが、東は〈内侍所〉[2]、〈日華門〉、西は〈軒廊〉、〈月華門〉、南は〈承明門代〉などで囲まれた南庭である。紫宸殿が真正面に見えるから、真南から描かれていることになる。

紫宸殿を見てみると、上長押に沿って〈獣形図〉の帽額が張られている。その紫宸殿の中心には上方に鳳凰の飾りがある八角の高御座がある。そこに冕冠を被り、赤い袞衣を着た十歳の霊元天皇が座す。その袞衣には日月など十二の模様が施されていた。そして、ここで注目したいのは、その霊元天皇の顔が明確に描かれている点である。実は、貞享四年（一六八七）四月に行われた東山天皇の即位式を描いた「東山天皇御即位式・霊元上皇御譲位行列図屏風」など、江戸時代の即位式を描いた作品が複数知られている。しかし、天皇の顔を真正面からここまで明確に描いたものが現時点では見つかっていない。これは、この屏風の大きな特徴だといってよい。

その天皇から見て丑寅の方向、つまり鬼門である東北の方向には〈摂政〉の二条光平が控え、天皇の前では〈執翳女孺三人〉が左右それぞれに位置して団扇形の翳を持つ。この六人の女孺は掲げた翳で天皇の姿を隠していた。そして、合図により翳を下げることにより、天皇の顔が現れる。これが即位式のクライマックスである。描かれているのは、この場面ということになる。この後、群臣たちは磬折、つまり深く礼拝した。

天皇の左右には屏風を背にして〈威儀命婦〉らが控えているが、天皇の右手奥に控えるのが璽内侍と〈剱内侍〉である。彼女らの役割は神璽と宝剣を捧げ持つことだった。そして天皇の斜め前方では親王代らが左右に三人ずつ広がるように立っている。彼らの足元には軾という敷物がある。以上が紫宸殿の中である。次に、紫宸殿の外を見てみる。

南庭には〈火爐〉と〈香納桶〉が配され、その傍に〈生火官人〉が二人ずつ左右に控えている。彼らは天皇の姿が現われた後、火爐で香を焚くのが役割である。この焼香により天に新天皇の即位を報告した訳である。紫宸殿と〈火爐〉〈香納桶〉の間では、左近の桜を背にして〈冷泉中将〉〈冷泉為清〉など三人の中将、右近の橘を背にして〈今城中将〉〈今城定淳〉など三人の中将が胡床に座す。彼らは挂甲という儀式用の鎧を着て、弓を手にしている。これには非常事態に備えるという意味があった。

〈火爐〉と〈香納桶〉の南には複数の幢や旗が立てられている。天皇の真正面に銅烏幢、その東に黒鳥の〈日像〉幢、〈朱雀旗〉、青龍旗。銅烏幢の西には白兎の〈月像〉幢、〈白虎〉旗、玄武旗が立てられている。更に、青龍旗の南には先端に黒毛牛の尾が使われた龍像纛幢、「萬歳」の文字が見えないが萬歳旗、〈鷹像幢〉が三本、赤い小幡が五本〈小幡五〉。玄武旗の南には龍像纛幢、やはり〈萬歳〉の文字が見えない萬歳旗、〈鷹像幢〉が三本、赤い小幡が五本立てられている。

それらで囲まれた場の中に、六人の〈外弁〉がいる。即位の宣命を読む宣命使も務めた〈宣命使小倉中納言〉〈小倉実起〉、それに〈外弁葉室大納言〉〈葉室頼業〉、〈油小路大納言〉〈油小路言隆〉、〈花山院中納言〉〈花山院定誠〉、〈四位桂宰相〉〈桂昭房〉、裏松資清である。よく見ると彼らの足元に将棋の駒のようなものがある。これらは立ち位置を示すためのものである。即位式の責任者は内弁の左大臣鷹司房輔だが、この外弁たちが内弁を助けた。彼らの南には〈承明門代〉がある。そこには左方に〈伴〉（伴友治）、右方に〈佐伯〉（佐伯鐵行）が控えていて、その傍らにはそれぞれ〈銅犬〉が配されている。

次に、紫宸殿の東と西を見てみる。先ず、紫宸殿の東である。紫宸殿の東端の南庭には文書や記録を扱う〈内記〉が控え、その東には〈執物諸司〉〈掃部寮〉〈内蔵寮〉〈大舎人〉といった官人たちが並ぶ。その南には中将代の〈中将代随身土山将監〉（土山武慶）、大将代の〈大将代風早左京大夫〉（風早実種）、少将代の〈少将代身土山将曹〉（土山奈武吉）が弓を手にして座り、その前に〈鼓師〉と〈鉦師〉が控える。彼らは鼓と鉦で式の進行を伝えるのが役割だった。その南には〈内舎人〉が三人、その近くに左近幄が設置されている。

次に、紫宸殿の西である。紫宸殿の西端の辺りに、白と水色の幔幕で作られた〈幄〉が設けられている。仮設テントのようなものだが、その中で兀子に座すのが内弁の左大臣鷹司房輔である。この内弁が即位式の責任者である。その幄の後方には〈官務〉と〈大外記〉が座している。その南には〈執物諸司〉〈掃部寮〉が並び、その後方には二人の〈鉦師〉。更にその後方に〈兵庫寮〉が座す。〈執物諸司〉〈掃部寮〉の南には〈鼓師〉と〈鉦師〉。その後方に中将代の〈中将代北面岡本将監〉（岡本清屋）、大将代の〈大将代東久世木工頭〉（東久世通廉）、少将代の〈少将代北面松波将監〉（松波光寿）が弓を手にして座る。更に、その南には〈中務輔〉、その後に三人の〈内舎人〉が座す。そして、その近くに〈右近幄〉が設置されている。

これら以外にも、南庭には注目したい描写がある。即位式を見に来た公家衆、そして庶民が描かれているのである。↖

↙〈承明門代〉の左右、〈日華門〉を入った辺りに、隣の人と指をさしながら談笑する者、何やら話し込む者、寛いでいる者、周囲を見回す者、手招きする者、暴れる子供たち、女性、僧侶の姿などが描かれている。実は、江戸時代の即位式は公開されていて、庶民も見物できた。それがここに描かれている訳である。

なお、第五扇の下方には〈班幔〉が巡らされた空間に〈大臣兀子〉〈大納言兀子〉〈中納言兀子〉〈参議床子〉などが描かれている。ここは大臣らの控え場所だったらしく、今ここに人はいない。また、第五扇と第六扇の上方には〈神仙門代〉〈無名門代〉とある建物が描かれているから、ここは清涼殿である。実は、左隻の同じ場所にも清涼殿が描かれていて、そこに同じく〈神仙門代〉〈無名門代〉とある。つまり、右隻と左隻の画面左端には清涼殿が同じように描かれているのである。右隻と左隻で、この部分を一致させる演出がなされている訳である。

2〈〉は、画面にある貼札の墨書である。以下同じ。

左隻　後西天皇の譲位

左隻には寛文三年（一六六三）正月二十六日の後西天皇の譲位の様子が主に描かれている。その内容を探ってゆこうとする場合、参考になる史料がある。室町時代後期の公家、一条兼良による『代始和抄』である。兼良は当代随一の学者であり、その有職書『代始和抄』は後世にも広く読まれた。そこに「御譲位の時は、警固固関、節会宣制、剣璽渡御、新主の御所の儀式等あり。是は毎度の事也」という一文あり、その内容が個別に詳述されているのだが、左隻はこの『代始和抄』に基づいた可能性が高い。先の一文にある「警固固関」「節会宣制」「剣璽渡御」「新主の御所の儀式等」の四つの場面で左隻が構成されているからである。つまり、

①警固固関が、第二扇の上方
②節会宣制が、第一扇と第二扇の中央
③剣璽渡御が、第三扇から第五扇の中央から下方
④新主の御所の儀式等が、第四扇から第六扇

このように描かれている。

譲位に関わる手続きや儀式は複雑である。それらを描こうとする場合、当然ながら内容の取捨選択が必要となってくる。そこで『代始和抄』が参考にされたようだ。また、そのように考えないと、なぜこの四つの場面が特に描かれたのかが全く説明できない。

そこで『代始和抄』に基づいたと考え、四つの画面がどのように描かれているのかを『葉室頼業記』『忠利宿禰記』など当時の記録に基づきながら具体的に見てゆきたい。

①警固固関

警固固関は譲位に際し、最初に行われることだった。警固とは天子の身辺を守らせることで、譲位以外の儀式でも行われた。また、固関は都での動乱阻止などを目的に伊勢の鈴鹿、近江の逢坂、美濃の不破の三関を守らせることである。その実行のため、三関を主管する国司に対して朝廷が勅符、官符、木契を送った。

後西天皇の譲位にあたり、警固固関の手続きが始まったのは寛文三年正月二十四日。雨模様の日だったようだ。その舞台となったのは仮御所となっていた近衛邸である。画面を見てみると、近衛邸の〈舊主御庭〉に設けられた陣の傍に〈陣官人〉が控えている。陣の奥にいるのは、〈警固固関〉で上卿つまり責任者を務めた左大臣鷹司房輔である。この左大臣が〈高辻大内記〉〈高辻豊長〉や〈小内記〉らに勅符、官符、木契を整えさせた。勅符は三関を固めよという勅命の文書であり、官符はそれに添えられた太政官の文書である。これらは木函に収められて固く封がなされた。また、木契とは固関使の正当性を証明する木製の割符である。木を二分して一片は朝廷に、もう一片は三関に置かれた。興味深いことに寛文三年の警固固関の際に作られた木契が現存している。（作品番号5）がそれである[3]。

左大臣からの勅符、官符、木契は〈伏原少納言〉（伏原宣幸）を介して固関使に渡された。ここには〈三関使樂人〉〈内舎人〉の姿が描かれている。ただ、この寛文三年、実際に固関使は三関に派遣されなかったようだ。警固固関の儀式と手続きだけが行われたと見られている。

②節会宣制

後西天皇による譲位の宣命が、公卿たちの前で読み上げられる場面である。宣命とは天皇の命令、宣制とはそれが読み上げられることをいう。これは寛文三年正月二十六日の午前中に行われた。舞台は〈舊主御殿〉、つまりこれも仮御殿となっていた近衛邸である。〈内弁左大臣〉（鷹司房輔）が内記に宣命の草稿を作らせる。それを後西天皇に奏聞し、宣命の文言が確定し、清書が行われる。この日、後西天皇は御簾の向こう側にいて姿を現さなかった。

その後、〈節会〉のため旧主御殿に参上した〈外弁〉の〈葉室大納言〉（葉室頼業）、〈中院大納言〉（中院通茂）、〈萬里小路中納言〉（萬里小路雅房）、〈中御門宰相〉（中御門資熙）らが異位重行で並ぶ。異位重行とは位階の高い順に並ぶことをいう。その前で宣命を読み上げるのが宣命使である。これを務める〈宣命使清閑寺中納言〉（清閑寺熙房）を内弁が召し、宣命を授ける。宣命使は中納言か参議が務めることになっていた。その後、内弁も諸卿の列に加わる。そして宣命使が宣制二段、つまり宣命を二段に分けて読み上げる。それに対し、諸卿は一段ごとに再拝し、譲位の宣命を畏まって承った。

③剣璽渡御

寛文三年正月二十六日、譲位の宣制が午刻（正午頃）に終わった。これに続いて〈剣璽渡御〉となった。剣璽渡御とは神器である宝剣と神璽が、旧帝から新帝に渡ることをいう。この舞台となったのも、やはり〈舊主御殿〉である。つまり、警固固関、節会宣制、剣璽渡御は全て仮御殿となっていた近衛邸で行われ、その場所が繰り返し描かれている訳である。なお、第二扇から第三扇の下方には仮御所に設けられた〈舊主仮内侍所〉が松や杉などの樹木を横にして大きく描かれている。ここに八咫鏡があった。

〈中園季定朝臣〉と〈持明院基時朝臣〉の近衛次将の二人が、神事で敷かれる莚道を歩いて旧主御殿に向かっている。〈摂政二條殿〉（二条光平）は弘廂、〈九條殿左大将〉（九条兼晴）と〈近衛殿右大将〉（近衛基熙）は簀子で二人を迎えている。その中園季定と持明院基時の近衛次将二人の前方では御簾が半分上がっていて、そこに〈此内二剱璽アリ〉とある。つまり、この御簾の奥に宝剣と神璽があったのである。これに先立ち、内侍によって宝剣と神璽が夜御殿から移されていた訳である。この後、中園季定が宝剣、持明院基時が神璽を持ち、摂政とともに新たに造られた内裏に向かう。これに諸卿が行列をなして扈従した。彼らが新御所に参集したのは未刻（午後二時頃）。新御所に到着した近衛次将の二人は新内裏で内侍に宝剣と神璽を授け、内侍がそれを安置した。

④「新主の御所の儀式等」

先の三つの場面とは異なり、この舞台は新たに造られた内裏である。剣璽渡御を経て〈新帝〉となった霊元天皇が、〈新殿〉つまり新内裏の〈清涼殿〉に出御する。画面を見ると、御簾が半分だけ上がっていて、霊元天皇の足元だけが描かれている。その傍らに、昇殿した〈摂政二條殿〉（二条光平）が簀子に敷かれた円座で控える。そこに新たに任命された〈新補蔵人竹内〉（竹内当笹）が召され、勅授帯剣牛如旧との綸旨が下された。つまり公卿の昇殿、勅授、帯剣、牛車などは、それ以前の通りにすべしという内容の綸旨が下されたのである。これが第四扇の上方に描かれている。

新帝の綸旨の内容を蔵人竹内から承るため、〈二条殿摂政〉（二条光平）、〈鷹司殿左大臣〉（鷹司房輔）ら諸卿が三列で南庭に並んでいる。彼らの衣の色が違うのは、官職によりそれが決められているからである。この後、綸旨を承り諸卿の〈公卿拝舞〉となる。これが第五扇から第六扇の中程に描かれている。

蔵人竹内は綸旨の内容を殿上口で〈出納〉にも下知した。後日に吉日を選んで儀礼文書を総覧する〈吉書〉が行われた。その舞台となったのは清涼殿であり、〈神仙門代〉〈無名門代〉が見える。これが第六扇の上方に描かれている。

左隻

【系図】

（107）後陽成天皇
　└（108）後水尾天皇
　　├（109）明正天皇
　　└（110）後光明天皇
　　　└（111）後西天皇
　　　　└（112）霊元天皇
　　　　　└（113）東山天皇

制作事情

これで何が描かれているのかが分かったので、最後にこの屏風の制作事情について少し考えてみたい。この屏風を描いたのは狩野永納だが、永納が独力で取材して描いたとは考え難い。永納には即位式を見る可能性があった。しかし、譲位に関する諸儀礼を見ることは当然ながら出来なかった。そうなると、作画の際に永納に多くの情報を与えた人物を想定する必要がある。それは、この譲位と即位に深く関わった人物であり、天皇あるいは公家でしかありえない。そして、その人物はこの屏風の注文主とも深く関わっていたはずである。では、それは誰なのだろうか。

残念ながら、これが確定できる史料が見つかっていない。ただ、この屏風を写しためくりがある（作品番号2、3）[4]。東京大学史料編纂所の「御即位図」（正親町本―二一―二三二）、「御譲位図」（正親町本―二一―二三二）がそれである。「是狩野縫殿助永納於／九条家図之畢（花押）」の墨書がある史料であり、公家の正親町公明が明和年間に蒐集した可能性の高いものである。いま注目したいのは、ここに九条家が出てくる点である。

というのは、実は狩野山楽と狩野山雪が九条幸家に命を救われている。その縁で京狩野家は江戸時代を通じ、九条家と深い関係があった。当然ながら、永納も頻繁に九条家に出入りしていた[5]。つまり、その九条家が、この屏風の制作に関わっていたかもしれないのである。その事情が明らかになるのはこれからだろうが、この正親町本が解明のための鍵になる可能性が高い。

4　藤原重雄「近世即位儀の絵図―東京大学史料編纂所架蔵本について―」『基盤研究（A）研究成果報告書　画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究』二〇〇八年

5　五十嵐公一『京狩野三代　生き残りの物語』吉川弘文館、二〇一二年

3　田良島哲「郵政資料館所蔵の寛文三年固関木契」『郵政資料館研究紀要』二、二〇一一年

7 礼冠（玉冠） 京都国立博物館蔵

奈良時代に制定された「大宝律令」に記される公家の最礼装が礼服である。礼服は当初、新年朝賀や大祓などの祭祀にも用いられたが、平安時代中期には即位儀礼にのみ着用されるようになった。礼服着装時のみにかぶる礼冠は、黒の三山冠の周囲に花唐草を透彫りした金属製の押蔓をめぐらし、後頭部に金属枠に黒の薄絹を張った櫛形を立て、いずれも各種の玉を飾るため玉冠とも呼ばれた。額上に飾る徽の霊獣は身分によって種類や体の向きが異なる定めで、ここにみる麒麟は四位の諸臣であることを示している。

（山川 曉）

7

8 礼冠（三山冠） 京都国立博物館蔵

律令において礼服は五位までしか規定されていないが、屏風では六位以下と思われる人物が礼服を着装する姿が描かれている。儀式進行係である典儀に従う賛者と、香をたくのを司る官人である。彼らがかぶるのがこの黒漆塗の三山冠である。

（山川 曉）

8

【関連土曜講座】

2月16日（土）

「天皇の即位図を読む」

京都国立博物館研究員 福士雄也

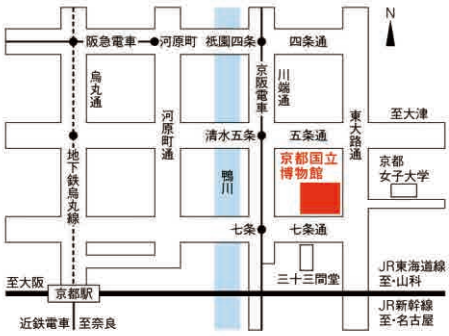
※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。定員200名、聴講無料（ただし当日の観覧券等が必要）。

※当日12時より、平成知新館1階グランドロビーにて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。

【展示作品一覧】

番号	作品名	筆者	員数	時代	所蔵	展示期間
1	霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風	狩野永納筆	六曲一双	江戸時代	十七世紀	通期
2	御即位図		六枚	江戸時代	十七～十八世紀	前期
3	御譲位図		六枚	江戸時代	十七～十八世紀	後期
4	譲位雑抄	正親町公明筆	一冊	江戸時代	明和七年（一七七〇）	前期
5	御即位記	正親町公明筆	一冊	江戸時代	明和八年（一七七一）	後期
6	寛文三年固関木契		二片	江戸時代	寛文三年（一六六三）	通期
7	礼冠（玉冠）		一頭	江戸時代	十八世紀	通期
8	礼冠（三山冠）		一頭	江戸時代	十八世紀	通期

［凡例］本特集展示の企画は、福士雄也（京都国立博物館）が担当した。大阪芸術大学教授の五十嵐公一氏に論文をご寄稿いただき、福士雄也、山川曉（京都国立博物館）が作品解説を執筆した。貴重な史料の貸与をご許可下さった所蔵機関ならびにご協力を賜った下記の方々に御礼申し上げます（敬称略、五十音順）。田原啓祐、藤原重雄



アクセス〇JR・近鉄＝京都駅下車、駅前市バスD2のりばから206・208号、D1のりばから100号系統にて博物館・三十三間堂前下車、徒歩すぐ。〇京阪電車＝七条駅下車、東へ徒歩7分。〇市バス＝博物館・三十三間堂下車、徒歩すぐ。または東山七条下車、徒歩3分。＊ご来館はなるべく公共交通機関をご利用ください。駐車場は有料となっております。

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM
京都市東山区茶屋町527
075-525-2473（テレホンサービス）
https://www.kyohaku.go.jp/

Feature Exhibition

First Glimpse! The Enthronement of an Emperor

January 30–March 10, 2019

Heisei Chishinkan Wing, Gallery 1F-4

2019 is the year planned for the abdication of the Heisei Emperor and the ascension of his son Crown Prince Naruhito to the throne. A little over three-and-a-half centuries ago, an earlier ruler, Emperor Gosai (1638–1685), abdicated his throne. In his place, Prince Satohito, the nineteenth son of the earlier Emperor Gomizunoo, ascended the throne as Emperor Reigen (1654–1732).

In recent years, a rare pair of folding screens has come to light depicting these abdication and enthronement ceremonies. How were such rituals conducted? Who formed the processions? These screens, which are being exhibited for the first time ever, give us a timely glimpse into the hidden world of imperial transition.